



浪漫主義的國家學の史的発展

十河 佑 貞

三 フイヒテの社會學

1 社會の本質と概念及び社會と國家との關係

大體に於てフイヒテは「ドイツ社會學の建設者」と看做すべきものである。彼は既に一七九四年の「學者の本分に就て」と題するエナ講演に於て、社會といふ問題について深遠なる科學的考察を試みてゐる。フイヒテはこの際尙著しく啓蒙思想に引付けられてはゐるが、彼には社會の本質及び全體なるものが十分明白であつた。

彼は先づ「人間自體、即ち單に人間、單に人間といふ觀念によつて一般に考へられ、孤立して居つて、如上の概念のうちに必然的に含まるゝ一切の條件の下にある人間」といふものゝ本分は如何といふ問題 *Fri Lies Werles Ltd. Felix Meiner, Leipzig 1917, S. 221f.* を提出し、これが解答として直ちに次の如く言ふてゐる。「吾々は孤立してゐるものでなく。」(S. 228) この簡單な言は明かにアルキメデスの論點を形成してゐるもので、之が今後常に彼の作物を支配してゐる個人主義的社會觀を動搖せしめてゐるものである。吾々が社會の概念を如何に定むべきかを問ふ場合、彼はかく答ふる。「余は理性的本質の相互の關係を名づけて社會といふ。而して社會といふ概念は吾々以外に理性的

本質が存在してゐるといふ假定、また吾々が理性を有たず、その爲に社會に共屬しない總ての他の物と之とを區別することの出来る特別な微證がなくては成立し得ぬ。」(S. 230) フイヒテに従へば、この假定は本來人間の天性に存してゐるものであるといふ。人間にはまた理性の概念や、理性による行爲及び思惟の概念があるが、人間はかゝる概念をば只單に自己に實現することを欲するのみならず、また自己以外にも實現さるゝことを見んと欲するのである。之は畢竟自己と同じ理性的本質が自己以外にもあるといふ欲求によるのである。」(S. 232) 之がフイヒテ哲學の根本法則の一である。後にアダム・ミュラー (Adam Müller) が「社會に對する人間の根本欲求」 (Urbegieris des Menschen nach der Gesellschaft) の中に之と同様の事を述べてゐる。しかしフイヒテは個人主義に對して更に激烈な攻撃を行ふてゐる。「社會的衝動といふものは人間本來の衝動に基くもので、人間は社會の中に生活すべきものと定められてゐる。人間は社會の生活の中に生きなければならぬ。人間が孤立して生活するとすれば、彼は決して十分に完成された人間とは云へず、而して當然矛盾して居るものである。」(S. 234) フイヒテは尙其表示を曖昧にしてはゐるが、かくの如く考ふる人は正しく社會の全體を解得して居るのであり、社會理論的には「宇宙主義者」である。

フイヒテはまた夙に「社會」と「國家」との概念を嚴密に區別してゐるが、彼の以前に於てはルソ (Rousseau) 後に於てはアダム・ミュラー、彼等は共に此等を同意義に用ひてゐる。「社會は單に國家ではなくして、一般に共同の場所に生活し、之に依つて相互的關係に置かれてゐる理性を有する人間の集團である。」(S. 227) フイヒテに取りては國家は唯單に「特に經驗的に限られたる社會の種類」である。しかも國家を社會と混同してはならない。彼は意識的にアリストテレス (Aristoteles) に反抗して、國家の生活を「人間の絶對的目的」の爲ではなく、單に「一の完全なる社會を築く爲の方便」であると考へた。「單なる方便である人間の凡ての制度と同様に、そのもの特有の破滅

を來すべきもので、即ち政府を無用たらしめることは凡ての政府の目的である。さて其時代は確實でない——而して余は其時まで數萬年、また數十萬年つゞくかは知る由もない——一般に茲では生活の適用に關して云ふのではなく、思索上の命題の修正に關して云ふに過ぎない——今其時代でない。しかし人類に先天的に示されてゐる進路には確實に凡ての國家結合が無用たるべき時がある。勢力或は狡智に代つて理性が最高の審判者として一般に認めらるべき時がある。」(S. 237)

フイヒテはこの有名な文句の爲に屢々「無政府主義」の先驅者として注目された。人は偶然いつかは之が國家に代るといふ、かのカルル・マルクス (Karl Marx) の「自由なる社會」を考ふるに至る。既にカルル・ルドウィヒ・フォン・ハルン (Karl Ludwig von Haller) は彼のものせる「國家學の再興」 (Restauration der Staatswissenschaft) の第一卷の脚註中に、フイヒテのこの言に對して激烈に抗辯してゐる。しかし確かにフイヒテは無政府主義者ではないのである。彼は教育家が無用となる——教育はどこまでも繼續するから決してかゝることはない——といふのと同じ様な意味で、國家結合は無用になるといふのに過ぎない。

2 社會の根本原理

フイヒテに従へば、「自由に依れる相互作用が社會の眞性」である。(S. 235) 更に社會そのものに就いて言へば、社會はかゝるものとしてより高い目的に達する方便ではなく、自己目的である。人間に備はれる「社會性」は自然消極的及び積極的の二方面に分たれる。

社會的衝動といふものは相互作用、相互的感化、相互的寄與及び攝取、相互的憂苦及び行爲を指すもので、之に反して單に他人の苦難を除去すべき因果關係及び活動をいふのではない。また之は吾々以外に自由なる理性的本質

を發見して、之と協同することを志すものである。また之は物質世界に於ける如くに從屬に非ず、平等を目的とするものである。(G. 336) 茲にも社會の機械的因果的構成——たとへ未だ不明瞭ではあるが——は克服されて「相關性」が社會的根本原理として認められてゐる。後にアダム・ミュラーが「生活全般に關する相關性の神祕」(Geheimnis der Gegenseitigkeit aller Verhältnisse des Lebens) の中に同様のことを述べてゐる。

しかしながら未だ理性的人間が方便或は機關として、換言すれば奴隸として使用される間は、社會的衝動といふものはないのであつて、之は向上した文化の生産物である。

故に社會衝動は各個人が社會に於て互に完全なるものに成らんとする努力によつて確定されるのである。然し社會が達し得ざる最終の目的は社會の各員を凡て「完全なるもの」となすことである。「もし彼等が凡て最高にして、また最後である目的に達し得たとすれば、彼等は皆互に平等となり、一つのものとなり、唯だ一體となるであらう」(G. 338) 一にフイヒテの全社會の統一といふ哲學的根本學說が現はれてゐる。彼によれば、單に一の統一せる精神的實在、神の實在、神的觀念といふものが存在し、之に凡て理性を有する實在(人間)が關係を保つのである。物質的實在は現實界に存するものでなく、全く吾々の意識の中に存し、吾々の思惟の表象である。吾々は自然界に於て統一の根本原理と矛盾してゐる多種多様のものを見るが、之は感覺上の缺點で、人は常にその完成の爲め、また絶對不變の統一、即ち神的觀念と合致する爲に、是非之を克服せねばならない。フイヒテはかゝる哲學的最終目的は「人間が人間たることをやめて神とならざる以上は」(G. 338) 社會に於て達し得らるべきものでない事を認めてゐる。しかし社會は常に其成員の内的結合によつて「完全に一致和合」してゐる理想的狀態までに殆んど接近しなければならず、「社會的完全」(G. 338) 「種族の完全」(G. 338) は吾々の社會に於ける本分である。「之について吾々

は「二様の技能」を必要とする。」一は與へることの技能で、即ち自由なる本質よりも他のものに働きかける技能、今一は取ることの感受性で、即ち他のものの働きから自分に最善の利益を取得する感受性である。(G. 338) 「人間の類を有する」もののみを部員としてゐる「大社會」はかくの如く「自由を共通の軸としてゐる無數の輪を皆が相互に握ることによつて成立するのである。」(G. 338)

3 種々なる階級の根源

人間の才智や能力は生れながら一様ではない。しかし人間の最高の法律、吾々自身を完全に一致せしむる法律は個人の一切の才智を平等に發達せしめ、凡ての能力が最高至全のものに完成されることを要求してゐる。各個人の才能が同じ形に完成されなければならないやうに、社會に於ける凡ての人々も同じ様に完成されねばならない。何となれば社會全體の窮局目的は「すべての社會人が完全に平等となること」(G. 338) であるからである。

此處に於いて、今社會的衝動、即ち「自由なる理性的本質と相互作用に置かれてゐる衝動」が有力にならねばならない。殊にかゝる社會的衝動は二つの形式によらねばならない。一つは「傳達衝動」として、即ち吾々が特に完成した方面から凡ての人を完成して、之を出来るだけ自己と同じきものに作り上げる衝動、今一つは「擷取衝動」として、即ち凡ての人が特に完成し、吾々が特に未完成である方面を彼等によつて完成する衝動である。「各個人は自己に生れながら缺けてゐる完全無缺なる教育を間接に社會の手から受くる」ことに注意せねばならない。「社會は個人の利得をば共同財産として凡てのものゝ自由なる使用の爲に蓄積するであらう」(G. 339)

技能を完成する目的は、理性と自然との絶えざる闘争に際して理性が自然を服従し、且つ自然の有する缺點を改善するにある。「社會は共存であり、しかも一個人の爲の社會である。個人の爲し得ないものは凡て社會の協力に依

つて成すことが出来る。故に各個人は生れながら平等でないにも拘らず、團體としては新たな確實性が生じ、この團體が凡てを一體に結合する。欲求の壓迫や、また欲求を助長する幾多甘美なる壓迫、此等が一層之を密接に結合せしむるものである」(ibid.) かくてファイヒテは後のアダム・ミュラーの如く、この場合欲求をば人間の不等等によつて演出された社會的事實として解釋し、集合派的意義に於て、抽象的個人性を基とせる從來の習慣的な「ロビンソンクルーソー式」の構造に反對してゐる。

4 社會の使命と目的

ファイヒテは種々なる階級が存在するのは結局人間の中に不平等を生ず不幸なる手段であることを十分に認めてゐる。しかし彼は人間に生れによる階級を認めて居らず、階級の選擇は自由選擇でなければならぬ、人間は強いのである階級に入れられたら、或はある階級から除外さるべきものでない、かゝる不當な位置に置かれる爲に屢々社會の一員を失ふに至るといふてゐる。「何人も自己の利益の爲に働かんとしてその同胞を疎外し、之に自己の教養を無用ならしむる權利はない。何となれば彼等は之を自分のものとする地位に置かれて居るもので、或意味に於てかの、教養は社會の生産物であり、社會の財産である。而してかのものが之によつて社會を利することを欲しないとせば、彼は社會の財産を掠奪するものである。各人は社會全般に利益を與ふべきのみならず、またその最善の意志を社會の窮局目的に向ける爲に全力を盡すべき義務があり、かくて人類を常に一層向上せしむべき義務がある。かゝる新たな不平等から新たな平等、即ち凡ての個人に文化の同様な進歩が生ずるのである」(ibid.) 之は確かにファイヒテ自身が認めてゐる如き理想畫であるが、かくあるべきであり、吾々はかく成るやうに努力しなければならぬ。必然的に種々なる階級が存在し、其數は理論上無制限であり、また人間の自然的才能や欲求に従つて作ら

れることについて、ファイヒテは更に各個人は自然の力によつて教育されるもので、二度までは過去の世紀の生活を生活せねばならず、また其れ以上には及ばないといふ詞で辯明してゐる。故に凡ての人間が先づ自己に社會が最も容易とし、また可能とする完成の一定の部分を選択し而して社會の他の部員をば自己が彼等を自己の完成に關與せしむる如く、彼等が自己を彼等の教養の利益に關與せしむるといふ希望に委するのことは正當のことであり、之こそ社會に於ける種々なる階級の根源であり、法律的基础である」(ibid.)

ファイヒテは更に社會が人間の自然の衝動により、何等の指導によらずして全然自然に、生活に適合する如くに變ることを説いてゐる。しかし社會の完成とか、不完全とかいふことを問題にすると、之が他の問題を生じてくる。

「社會に於ては凡ての人々の欲求の發展と満足との爲に、ことに凡ての人々の同程度の發展と満足との爲に注意されるか」といふ一層廣汎なる問題に關聯して来る。この點に達して始めて完全な社會といふことを口にすることが出来るのであり、而して之が社會の目的であるといふべきである。(ibid.)

5 自然 狀態

吾々は今後如何にファイヒテが次第に英佛の自然法に關する考察から分離するに至るかを追究する機會に接するだらう。しかしながら既にファイヒテは「學者の本分に就いて」といふ講演の最後の章に於て、自然法に關して特に重要な事項の一つ、即ちルソーの空想的に稱揚したる「自然狀態」をば根底から排斥して居り、ルソーの假説は明かに科學的確實性を有たない事を表はしてゐる。ファイヒテはこの場合ルソーに對し十分正當であり、ルソーが彼の時代の不徳を嫌忌して、非常に精練されたる社會文化の中に一切罪惡の根源を見、之が爲に一切文化からの隔離を説き、更に「人間の幸福を自然狀態以外」に認めなかつたことを證明してゐる。ルソーの所謂自然狀態に於ては人

間本來の才智の完成を期することが出來ず、それが一度たりとも致されて居らず、人間は動物的性情以外の欲求を有たずして、牧場に群居する動物の如く生活しなければならぬ。實際ルソーの感情を非常に興奮せしめたる如きかゝる状態にあつては、如何なる罪惡も發生しなかつたに相違ない、しかし同時に人間は——彼は確かに一個の人間であつて決して動物ではない——この状態に止まるべきものと定められてはゐない。彼が言ふ如く人間の罪惡はかくて停止されるかも知れないが、同時に道徳及び一般に理性も停止されることは確實である。人間は理性を有しない動物となるべく、之は新しい動物の種族であつて、最早人間は全然ないこととなる。」(S. 268) フイヒテはまた傑出した論理によつてルソーの思想範圍に於ける大缺點を發見してゐる。「彼は不注意にも只だ自然状態からの脱出によつてのみ完成し得べき自己及び完全なる教化を有する完全社會を自然状態に置き換へ、また不注意にも彼等は既にかゝる自然状態から脱出し、且つ教育の全過程を経過したものと考へてゐる。しかし脱出したのでもなければ、また完成したのでもないのである」(S. 269) 之はルソーの非常な謬見である。

フイヒテは自然状態といふものを眞に存在する或物、ある昔物語、あるユートピアとして見てゐる。即ち「この状態は理想的のものと考へられるならば——凡ての理想的のものはかくある如くにしても到達することが出來ないものである——之は往古の詩人が書いてゐる肉體的勞働の伴はない肉慾的快樂の黄金時代である。かくて吾々の眼前にはルソーが自然状態の名の下に定めたもの、吾々の背後には詩人が黄金時代の名の下に遺したものが横はつてゐる。(S. 270) 彼は之について尙ほ卓越せる注意をつけ加へてゐる。「吾々が將來になるべきものを既に吾々があつたものとして描き、また吾々が達せねばならないものを既に失はれたるものとして現はされたことは概して特に前世界に於て屢々現はれた現象であり、この現象は其根本原因を人間の本性中に有するものである」(S. 271) このフイ

ヒテの説は只にルソーに的中するのみならず、また近代の社會主義者や、その社會主義的原始社會の記述にも的中してゐるものである。

吾が最後に今一度簡単にフイヒテの「學者の本文に就いて」の講演の社會的理論の内容に關して瞥見すると、最も重要な結論として次の如きことを確定することが出来る。即ち根本的に十分普遍的なる社會概念の確立、社會的根本法則としての相互性の認識階級の選擇は必らず「自由による選擇」でなければならぬとする階級の必然性、而して社會成立以前の自然状態の否認等である。此等の事は凡て社會的解釋への萌芽と見るべきである。吾々は今更にフイヒテの「知識學の原理による自然法の基礎」(1796—1797) Grundlage des Naturrechts nach Prinzipien der Wissenschaftslehre) のうちに見られる如き國家學說に於て、かの解釋的發展を追跡したいと思ふ。